

【新刊紹介】

日本地誌研究所 編：地理学辞典

二宮書店 A 5 版 889頁 (¥ 7,300)

出版関係の人の話によれば、近ごろは辞典の出版がとくにさかんである、という。そういえば、このところ百科辞典の種類もめっきり多くなった。辞典の出版が多い背景には、近年の人びとの暮らしや、学問、技術の中に、必要とされる情報（知識）が多くなり、たくさんの新しい専門語ができ、また従来からあった言葉も、それぞれの分野でかなり特殊で限定的な意味で使われることが多くなったためであろう。ここに紹介する地理学辞典も、そうした背景のもとに生れたものといえるようだ。「学問分野における研究水準の高さは、それぞれの分野における独自の専門術用語の豊かさと、その概念の正確度によって測りえられるといっても過言ではない。どのような分野であっても、研究成果を発表し、討論を重ねようとする場合、術用語の概念が不正確であったり、あいまいであったりして、共通理解が不十分な場合は、その効果を期待することは至難である」と「はしがき」で日本地誌研究所長の青野寿郎博士が述べている。

ところで気象学は、気象の生成過程を物理学的に考察する時は、地球物理学の一部門であるが、人びとが暮している地域の自然環境を形成する一つとして気象を把握しようとする場合には、地理学に属する。したがって、

この辞典には、気象、気候に関する用語が多く取入れられており、たとえば気象に関していえば「三寒四温」「等風向線」というような用語あたりまで拾われている。一方、地形、地誌、人文地理学の用語も多く掲載されており、それらの中には、メソ気象学や都市気候学、中小気候学あるいは防災気象学を通じて、気象関係者がすでにしばしば用いている言葉や、今後、ひんばんに用いられるようになると思われるものがたくさんある。また東日本、西日本、北陸、山陰、裏日本、表日本、中部圏などの呼び名の解説が、その内容の歴史的背景を含めて明快に記されており、気象学の論文や解説を書く場合に役立ちそうである。この辞典では「裏日本」については、明治以降に使用された用語で明治39年の「大日本地誌」にでてくること、19世紀までは裏日本と表日本の文化、経済的な優劣は現在とは逆であったこと、なぜ裏と表の用語ができたか、造語にあたっては表日本を外日本、裏日本を内日本として出発すればよかった、などということが、実に興味深く記されている。辞典をひくという目的なしに1ページ1ページ読んでいても面白い本といえる。

(倉嶋 厚)